

愛されています

秦野 裕子



秦野裕子さん

主は、生まれる前から私を召し、母の胎内にいる時から私の名を呼ばれた。
(イザヤ 49・1)

この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。
(1コリント 1・28)

神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとなされました。神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによつてご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。
(エペソ 1・4・5)

私は幼い時から花や木々、山や川を見てこれらを造られた神様がおられると思っていました。親に話しても一笑に付されていました。小学校の半ばで、てんかんの病が与えられて、当時は世間で忌み嫌われており、両親が周りに知られないようにしていたため、自

分の存在がとても辛く、いつも劣等感を持つていた少女時代を送りました。

大人になるまで聖書に出会うこともなく、教会へ行くこともなく、この世の流れに従って歩み、二十代後半で結婚し、三人の娘にもめぐまれました。外側からは幸せに見えたと思いますが、心の空洞は埋まることはありませんでした。

育児に追われつつも長女が幼稚園に入り、園児のお母さんからベック兄の家庭集會に誘われ、初めて集會に行きました。メッセージは全然解りませんでしたが、聖歌(その当時使用)で涙が止まらず、故郷に帰った感じがし、探し求めていたものが見つかったように思いました。自分の救いが何年何月何日とはつきり分りませんがこの頃、イエス様を受け入れ救いに与っていたと思います。

その後、千葉に引っ越し、数十年の間主に守られて、子供達も成人していき、私たち夫婦も熟年を超え主人

の退職を迎え、既に決まっていた再就職のため中国の青島へ二人で渡りました。

その頃の子供達のことですが、次女は既に結婚していて、後の二人は未婚でした。暫らくして、三女に集會の兄弟が紹介され、翌年の春に結婚に導かれ、長女も上海のキャンプで集會の兄弟に出会い、その翌年にと二人続けて結婚に導かれ、親を離れてそれぞれに家庭を築いています。

私達は日本を離れていて何もできませんでしたが、すべて主が成し遂げてくださることを体験させて頂きました。次の聖書のことばの通りです。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。
(詩篇 37・5)

この頃から、主は私に、ご自身が生きてご臨在し、「すべてをわたしにゆだねなさい、わたしがする」と

7人の証し

Unser Herr lebt

語ってくださったのですが、自我の強い私には薄紙を通して見る様にしかわかりませんでした。

三年ほどで帰国し、私はまた集会に集い始め、あちこちに出掛ける日々が続きました。しかし、仕事も辞めて、家に居るのが何よりも好きな主人はだんだんお酒の量が増えてきて、呑みすぎると私に絡むようになりました。それが、年と共にエスカレートしていき、話し相手をしていけると、喧嘩になり何度か家を飛び出したこともありました。しかし、一人で生活していく基盤も自信もなく、いつもすぐごと家に帰っていました。その時は自分が本当にみじめにしか思えませんでした。その苦しみを姉妹たちの祈り会で話し、ともに祈りました。

その後、ベック兄とのお交わりが与えられて、その晩から、主人のことはチョット主にあずけて、先ず、主と私のことを求め、私の心を探り調べていただき始めました。よく、依存症は本人の問題だけでなく、家族全

ない。

(イザヤ 43・25)

数日後に主人にも「いろいろ言っておめんね」と謝ることができ、主人の顔がパツと明るくなったのを今でも忘れません。

数か月後、市の健康診断で主人に食道がんが見つかり、医師の指導で自分では絶対止められなかったお酒もタバコも主がいっぺんに取り去ってくださいました。次の聖書のことばとおりででした。

それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。
(マタイ 19・26)

主人の病は進行が早く、抗がん剤の副作用も多く、救急搬送の入院を何回も繰り返すようになりました。主人の先がそう長くはないと思うと、一日も早く救われて欲しくて、主人の救いのためと思い、いろいろ手

体の問題と聞いていた事が思い出されました。

主人の言葉の暴力は許せない一方で、更に自分の心がさかのぼって探られると、夫に従わない私、夫の前に出る私、夫を愛せず自分しか愛せない私のはっきり示されてきて、その罪が重くのしかかって来ました。イエス様の御前に全部出して早く楽になりたいと思うようになり、悔い改めに導かれ、イエス様の血潮によってすべての罪が赦されたと思ふことができた。すっかり心が軽くなりました。主が赦し、忘れてくださったので、もう私の罪を探してもないと聖書は語ってくださいています。

御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。
(1ヨハネ 1・7)

わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さ

を尽くしましたが、頑として拒み続けられ、力も心も尽き果てて「イエス様」と心の底から叫んでいました。すると、その先を祈らない前に、まるで、梅雨空のどんより重く覆われた厚い雲が一挙に強い風に吹き払われた青空のような感じの心の状態の中で、聖書のことばが次々と現れ、急いで聖書を開きました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。
(使徒 16・31)

わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。

(イザヤ 55・11)

もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る…

(ヨハネ 11・40)

7人の証し

Unser Herr lebt

がとこしえにあります。

(詩篇 16・11)

心がイエス様の方に向けられて、「イエス様、今まで私はあなた様を信頼せず、肉によって頑張って歩んでいたこと、ごめんなさい。あなた様は既に聖書のことばで主人の救いを約束してくださっており、あなた様ご自身が成し遂げると言ってくださっていますから感謝します。今まで邪魔ばかりしてきてごめんなさい。もう心配しなくてよいから感謝します。これからよろしくお願いします」とイエス様の御前に祈りました。

その時からイエス様の事が嬉しくて仕方がないので、揺るがない確信と信頼、明るい希望、変わらない喜びと平安で満たされました。目に見えるものを見てしまいうこともありすが、主を仰ぐと、またすぐに戻されますから感謝です。次の聖書のことばが今でも喜びをくださっています。

あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。

あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみ

主人の最後の入院の時、集会の兄弟が来てくださいました。兄弟の祈りに主人は顔をくしゃくしゃにして、ボロボロと涙を流していました。主人は涙にむせて言葉も出せませんでした。祈りの後の表情は晴れやかで輝いて見えました。主はこの様にお約束を成就してくださいました。約一か月後に主人はイエス様に呼ばれて天に召されました。

私は今、一人で暮らしていますが、年老いて頑張る必要もなく、私はすでにキリストとともに十字架につけられ、もはや私が生きているのではなく、私の内に主が生きてくださっており、主が歩ませてくださっていると感じています。まだ救われていない家族、親族が大勢いますから、この方々の救いの約束を感謝して、主が最善の時に成就してくださるのを待ち望みつつ、信頼関係を深めていきたいと思っています。

この証しに導かれ、この世に生を受けてから今日に至るまでの歩みを振り返ってみる機会が与えられて感謝です。生まれる前から選び出され、わがまま、劣等感のかたまりで、失敗ばかり、不従順、不信仰な私を丸抱えて愛してください、忍耐をもつて、さとし、教え、霊の目が開かれるように導いてくださっています。これからも、主を仰ぎ、御霊によって歩めるよう、今日も見守って祈ってくださいっている主に心より感謝し、御名をほめたたえます。

「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」訓練と思つて耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。

(ヘブル 12・5〜7)

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものでなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

(ヘブル 12・11)

主は今日も生きてご臨在してくださっています。愛されています！

秦野 裕子(はたの ひろこ)

東京都江戸川区出身、東京家政大学短期大学部被服科卒業

夫 照雄(てるお)二〇一四年召天

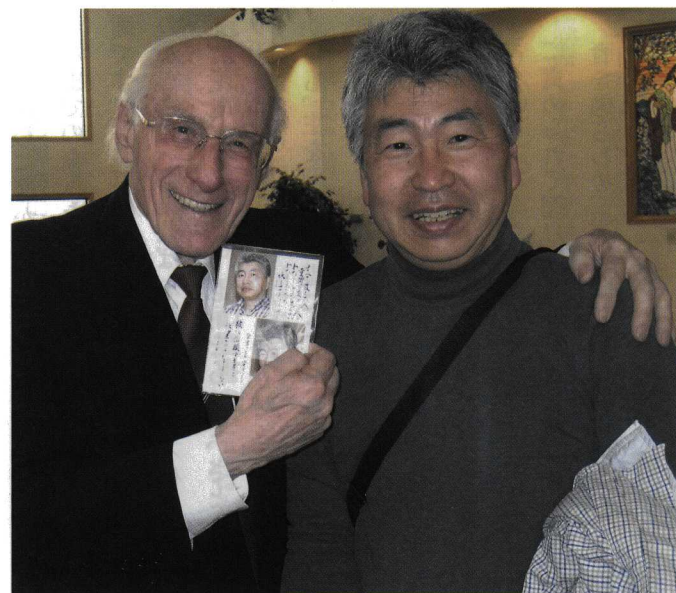
長女 村上 美由紀

次女 尾暮 かおり

三女 松下 たまき

頑かたくな私の心の戸をも叩き続けて くださった主

海老根 敦つとむ



ありし日のベックさんと

聖書との出会い

私が初めて手にした聖書は、結婚後信仰に導かれた家内がプレゼントしてくれたものです。家内は、一九九六年に入院先でキリスト集会の方にお会いしたことがきっかけで、信仰に導かれました。キリスト集会に集い始めた家内に「個人的なものにとどめてくれるなら、行くことについては構わない」と私は言っていました。聖書に「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」(使徒16:31)とあるのを信じ、必死にイエス様を伝えようとしている家内に対して、私は「自分には必要ないから放っておいてくれ」、「子どもたちが自分で選択できるようにするまでそっとしておいてほしい」と言っていました。私は自分のことばかり考えていて、人の話に耳を傾けることに欠けていましたので、家内とは信仰以外のことも夫婦喧嘩げんかになることが度々あり、その頻度も増しつづありました。

試練

そのような私に試練が与えられました。次男、晃あきらの召天です。突然でした。

晃が中学二年生だった二〇〇四年三月四日の朝、所属していたバスケット部の朝練習で、中学校の外周を走っている途中で倒れ、そのまま天に召されたのです。葬儀は、家内の提案もあり、キリスト集会にお願いしました。自分が未信者であり実家が仏教であることは考えずに賛成しました。なぜだか理由はわかりません。当時の私は、事の大きさに茫然ぼうぜんとしながらも、感情移入をせず、映画を見ているような落ち着いた部分もあり、変な感覚でした。このような状態は、晃の召天直後から葬儀を経て、命の大切さを伝えようと「いのちの木」と名づけた台湾緋桜ひざくらの記念植樹(四月十七日)の頃まで、一か月半ほど続きました。

子どもを亡くした親が、感情に任せて学校や教育委員会などに責任を追及するニュースをよく見かけま

すが、私たちには、それはまったくありませんでした。晃の死は、誰かの過失で起こったわけではなく、緊急事態の中でも適切な方がその場に居合わせ、出来る限り応急救護をしたけれども、結果的に召されたのだと思っていました。少年野球で経験のある町工場の社長が、校門近くで倒れた晃の不調に気づき応急措置として胸を叩いてくださいました。また体育を専門とする校長先生と担任の先生が、救急車の到着まで交替で心肺蘇生はいそせいをしてくださいました。そして子どもの突然死に詳しい医師が、晃の診察をしてくださいました。

葬儀の中でベックさんは「晃君は走ることが大好きで、走って行ってそのままゴールインしちゃった」とおっしゃいました。今でも状況を的確に表した言葉だと思っています。責任の所在を追及することよりも、息子たちの同級生や先輩後輩が通夜と葬儀前に自宅に来てくれたときの様子などから、彼らが受けた衝撃の大きさの方が気になっていました。不登校だった子も

自宅の晃を訪ねてくれました。逆にショックで学校に
来られなくなり、ふさぎこんでいる子もいると聞いて
いました。私も家族と同じ思いでいてくれる子ども
たちが大勢いることを知りました。

晃が召天した当時の家内は、暗く沈むことなく平安
の中にあるようでした。

一方、私は表面的にひとつひとつこなしてはいる
ものの、心は暗闇の中にありました。記念植樹後、「な
ぜ、晃なのか?」「晃を取り上げてどんな意味があるの
か?」「神を受け入れないことに對する天罰か?」など
と繰り返して考えこむようになっていました。

私の様子を見かねた家内は、病人に薬を勧めるのと
同じだと、イエス様に頼ることを提案してくれました。
ところが私は、すべて聖書の話になることに反感を覚
え、家内に対して怒鳴り、暴言を吐き、信仰に向き合う
ことを激しく拒んで、自分に頼ることをやめませんでした。
私はもともとと仕事一途な人間でした。晃が召天

する二年前に会社が倒産し、当時は会社更生法に基づ
く再建の最中でした。会社規模が半分以下になり、希
望退職等で配属員が急減した部署を任せられ、自分の力
のみに頼ることに拍車がかかっていました。

ただ、イエス様に頼ることを拒否しながらも矛盾し
た行動をとっていました。「音楽は好きだから」と言っ
て、長野県御代田町にある西軽井沢国際福音センター
での「喜びのコンサート」や「メサイア・コンサート」に
出かけていました。参加すれば集会の皆さんとお話し
することもありましたが、信仰からは目をそむけてい
ました。

氷解のきざし

家内が一九九七年に信仰に導かれてからの七年間も、
二〇〇四年に晃が召天して後の九年間も、今思えば私
はずっと主を無視し、拒否し、そむきを繰り返して、自己
中心と虚栄に加えて、強い懷疑心と偏屈で意固地な性

格をあらわにして生きていたと言えます。しかし、そ
のような私も離職を機に徐々に碎かれ始めることにな
りました。

・日曜礼拝・福音集会への参加

大学卒業後三十一年間勤めた建設会社を二〇一三年
四月末に離職してから、「信仰について、今まで自分の
頭で理解しようと考えてきたけれど、自分で判断せず
にとにかく何でも受け入れてみよう」と思うようにな
りました。まず、五月から春日部での日曜礼拝・福音集
会と浦和と春日部の家庭集會に参加し始めました。し
ばらくすると、聖書を読み、賛美歌を大声で歌うよう
になりました。賛美は、自分で考えることなく、素直に
歌詞に耳を傾けると、大事な部分に触れているような
感覚を持ちました。

なぜ壁が取り払われたのかは今でもわかりません。
いくつかの個人的な環境の変化が影響しているのでは

ないかと考えています。一つ目は、会社再建で頑張る
私を氣遣い声をかけてくれた晃に對し、「会社更
生終結」という結果により応えることができたと思え
たこと。二つ目は、責任者として関わった再建後の新
組織の立ち上げと通常業務への定着を成し遂げ、心に
余裕が生まれたこと。三つ目は、定年間近となり、現状
にとどまることに疑問を感じ、新たな職場へ移る意欲
が出てきたこと、などがありました。

・兄弟姉妹との交わりによる心境変化

ベックさんには何度も話し合いの場を持っていただ
きました。いずれも自分からではなく、集会の方から
声をかけられお会いする機会を得ました。その後、節
目、節目でも声をかけていただきました。初対面の頃
にかけていただいた言葉は、「理解したから信じるの
ではないよ」でした。一瞬で私の性格を見抜かれたよ
うな感じがしました。

お会いした集会の皆さんは、私と初対面であっても、信仰を持つ前も含めたご自分の信仰の歩みを赤裸々に語ってくださいました。信仰に導かれる経緯は一人ひとり違うことを実例として知ることができるとともに、未信者である私をそのまま受け入れていただいているという安心感を覚えました。

毎週日曜礼拝に集うようになると、信仰をもつことを生活の中で具体的に示してくださる方々との交わりが与えられました。そうした皆さんの中には、聖書のみことばに触れる機会を制限されると体調をくずすという女性や、帰宅後まず聖書を読んで主との直接的な会話で疲れをとるという男性もおられました。この方からは、即席で手書きの聖句のカードを数度受け取ることがあり、内容がそのときの私の心の状態や性格を的確に表しているのに驚かされていました。ベックさんをはじめとする集会の皆さんとの交わりは、じわりじわりと私の中にしみ込んでくるものがありました。

・家内とのかかわりでの変化

家内に対する私の態度は相変わらずでしたが、集会への参加頻度が増すにつれ、ときどき、家内の言うことに耳を傾けることができるようになりました。

以前、私は家内に何度も離婚を切り出していました。そのたびに「聖書にはならないと書いてあるからしない」と言われ続けました。言い合いを繰り返しているうちに、離婚はできないのだと思うようになりました。

イエスは答えて言われた。「創造者は、初めから人を男と女に造って、『それゆえ、人はその父と母を離れて、その妻と結ばれ、ふたりの者が一心同体になるのだ。』と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結びあわせたものを引き離してはなりません。」 (マタイ 19:4-6)

人が妻をめぐって、夫となったとき、妻に何か恥ずべき事を発見したため、気に入らなくなった場合は、夫は離婚状を書いてその女の手渡し、彼女を家から去らせなければならぬ。(申命記 24:1)

家内は何ら恥ずべき事をしてはいません。その後、次のような聖書のみことばに出会い、ようやく腑に落ちました。

また、信者でない夫を持つ女は、夫と一緒にいることを承知しているばあいは、離婚してはいけません。なぜなら、信者でない夫は妻によって聖められており、また、信者でない妻も信者の夫によって聖められているからです。そうでなかったら、あなたがたの子どもは汚れているわけです。ところが、現に聖いのです。

(1コリント 7:13-14)

長い間、^{あきら}晃の召天について、なぜ家内が平安でいられるのかまったく理解できませんでした。家内は「^{あきら}晃がいなくなったのは寂しいと思う気持ちになるのだけれど、それ以上にはならなくて悲しみから守られている」と言うのです。何度も耳にしていたことですが、ある日、このことばがあらためて耳に聞こえてきました。寂しさも含め二人で共有できるものがあるという気持ちになりました。

また、あるとき、家内に「^{あきら}晃が亡くなったことは、神を受け入れないことに対する天罰ではないかと思うことがある」と言うのと、「そんなことはないと思うよ」という返事でした。そして次の聖書のみことばに出会いました。

私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。

(詩篇 103:10)

わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたの
そむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さ
ない。
(イザヤ 43・25)

・転職先での行き詰まり

転職した職場において主に人間関係で悩むことがあ
り、家内に相談すると「詩篇37篇を読んでみては」とア
ドバイスを受けました。繰り返し読んでみると、いら
つく気持ちは収まりだし、さらに読んでみると次の箇
所が37篇の主題だと思えるようになりました。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成
し遂げてくださる。
(詩篇 37・5)

救いへの導き

二〇一六年十一月から一か月間の父の入院を機に、
高齢となった両親をサポートするために茨城県に戻る

必要性を感じました。四年間務めた転職先を年度末で
退職することに決め、十二月末に職場からも了解を得
ました。

こうした折に、家内から、茨城に戻る前に晃の記念
会を開きたいと言われました。晃の召天からは十年以
上経っていましたが、毎年、命日に合わせて中学校に
訪れる同級生、先輩後輩、先生、子どもたちの親と会っ
て近況を確認し合うことが続いていました。幾人かの
子どもたちとは、高校生のバスケット地区大会で出
会ったり、自身が出場する大学最後のバスケットリー
グ戦観戦に誘われたり、就職先の中華料理店へ食事に
出向いたり、個別の交流がありました。記念会には
このような関係者を招いて、感謝を伝えながら晃を偲
ぶことができればよいと賛成し、キリスト集会にお願
いして、命日である二〇一七年三月四日に行うことに
しました。

記念会のプログラムは、吉祥寺キリスト集会の葬儀

で配られたものを参考に、通常の内容(葬儀の式次第、

賛美歌、朗読用の聖句)に加えて、子どもたちや家族の
写真と聖句を載せたものを作成することにしました。

作業の分担は、写真の選択は家内が、聖句の選択は家

内と私が、聖句を毛筆で書くことを含め実際の作成・

印刷は私がすることとなりました。私は聖句を集会の

小冊子や「みことばカード」から選びました。毛筆で書

くには聖句を覚える必要があり、選ぶ作業も合わせる

と必然的に聖書のみことばに触れる時間が多くなりま

した。繰り返し書いているうちに、晃の写真を見ても

以前のように暗闇に落ち込むこともなく、心が落ち着

いてきました。信仰に対する自分勝手な思いが薄らい

でいました。プログラムが完成するころには、今まで

学んできた聖書で語られている大切なこと、「ごめん

なさい」、「今までありがとう」、「これからよろしく」

のうち、自分には「ごめんなさい」と子どものように素

直に言えないことが問題なのだと思うようになりました

した。

子どもたちのようにならない限り、決して天の御国に
は、はいれません。
(マタイ 18・3)

晃の記念会が無事に終わって、退職直前の三月末に、
家内が足首を骨折し一ヶ月の入院となりました。入院
中は私一人で日曜礼拝・福音集会に集っておりました。
四月初め、礼拝中、いつものように「…イエス様をご
自分の救い主として信じている方のみがあずかってく
ださい…」の案内で聖餐が始まると、パンが回ってき
ました。この時、その後に続く「…そうでない方は次
の方にお回しください」との言葉を心の中で復唱しな
がら、なぜか受けてみようという気になり、ちぎって
口の中に入れていました。ぶどう液についても同様で
した。これ以降、聖餐で順番が回ってくると、直前の案
内で言われたことを自分で確認してから聖餐にあずか

るようにしています。

こうして聖餐にあずかれるようになった証しとして、二〇一七年八月十九日、夏の御代田キャンプにおいて、夫婦で受洗することができました。親しくしていただいていた兄弟が、次のみことばをくださいました。

神よ。あなたへの誓いは、私の上にあります。私は、感謝のいけにえを、あなたにささげます。あなたは、私のいのちを死から、まことに私の足を、つまずきから、救い出してくださいました。それは、私が、いのちの光のうちに、神の御前を歩むためでした。（詩篇 56:12-13）

受洗の後、多くの集会の皆さんが喜んでくださいました。受洗の直前まで逃げようとしていましたので、まるで自分のことのように喜んでいて皆さんとどのようにに接したらよいか当惑しながらも、心の中に温かいものが湧いてくるのを感じていました。また、当日は、

突然の連絡でもあり、仕事で都合がつかないでいた息子が、コンピュータシステムのトラブルで仕事を中断せざるを得なくなり、皆さんから私が祝福を受けているさなか、千葉県から駆けつけてくれました。

救われてからの変化

救われてから、表情が和らいだと言われることが多くなりました。集会に頻繁に集うようになった二〇一三年五月、両親には明るくなったと言われました。そして、今では家内に「まったく別人」と言われるに至っております。私たちが体験することに偶然はないと思えるようになり、小さなことも恵みであると気づき、主なる神様のみことばにかなう祈りは聞き届けられるという実感を持てるようになっていきます。しかし、いまだに信仰は幼く、実のところはベックさんの言われる「肉（生まれながらの自己中心）のキリスト者」であり、すぐに高慢な自分に戻り、聖霊の御声を

聞く余地のない状態になってしまいがちです。

最近の出来事

二〇一七年十一月初めに実家近くに引っ越しました。両親には、聖書に書いてあるみことばを信じる者となったことを告白しました。召された見や伯父は、再会できると信じることができ、拜む対象ではないことも伝えました。この時、両親は怒りだすかもしれないと覚悟していましたが、淡々と受け止めてくれました。今も両親にとっては、ことばで言い表せない様々な思いはあるようですが、信仰をもった私を否定せずに受け入れてくれています。

二〇一八年一月、体調を崩していた母が高熱により入院し、その夜容態が急変し、厳しい状態でした。数日間、夜中に付き添い、母と二人きりになりました。賛美集「日々の歌」や童謡を枕元で歌い、「みこころのままに」と祈りながら、一方で母にまだ福音を伝えていな

いことをどうか配慮してくださいとも祈っていました。その後、母は二か月後には退院することができ、七月下旬に六日間の入院がありましたが、今も元気に屈託のない笑顔を見せてくれています。

母の入院中、「自宅」、「両親の家」、「病院」の行き来を繰り返す生活となり、父との食事の機会が増えました。父の許しを得て、食前には集会の方が作られた小冊子「ひかり」や「あなたとともに」の中から聖書のみことばを順番に短く朗読し、感謝の祈りをしていました。父は何も言わず待つていてくれるだけなので、祈ることを躊躇（ちゅうちょ）することもありませんでした。そのうち、私が小冊子を探すのに時間が掛かっていると「今日はやらないのか」と尋ねられたりすることもありました。そして母が退院してすぐのときに、祈る前に食事を始めようと母を制して「敦（つとむ）が祈るんだ」と言い始めました。しばらくしてから、父も母も同じように祈りを聞いてくれるようになりました。

二〇一八年六月十四日、日立キリスト集会の家庭集会にて証しの機会をいただきました。両親に聞きに來てほしいとお願いすると、父が母に「社会勉強の一つとして行こう」との一言で参加してくれることになりました。その日、集会に行く前「勧められても入会はしない」と言っていた父ですが、帰りには、集会の皆さんのことを「新しい友達ができた」とうれしそうに振り返っていました。また家庭集会後、みことばの入った当日の写真をいただいたとき、父が聖句に気づき、「これは何に書いてあるのか」と聞いてきました。ある方に教えていただいたことですが、本当に「みことばに力あり」と思わされています。

わたしの目には、あなたは高価で尊い。

(イザヤ 43・4)

私の信仰について両親がどのように捉えているのか

海老根 敦(えびね つとむ)

一九五八年 茨城県ひたちなか市(旧勝田市)生まれ、市立佐野小学校、市立佐野中学校、県立日立第一高等学校、私立東京理科大学理学部卒業、佐藤工業株式会社(退職)、社会福祉法人 久美愛園(退職)

父 保(たもつ)、母 はつの

妻 純子(じゅんこ)

長男 豊(ゆたか)

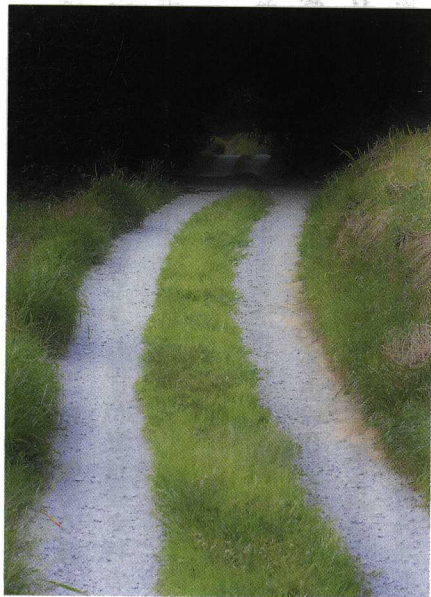
次男 晃(あきら) 二〇〇四年三月召天

わかりませんが、家族、親、兄弟の救いを祈り続けます。今は、両親がふたり一緒に本当の平安の中で過ごして欲しいと願うばかりです。最後に、みことばを三つあげて証しを終わらせていただきます。

怒る者は争いを引き起こし、憤る者は多くのそむきの罪を犯す。
(箴言 29・22)

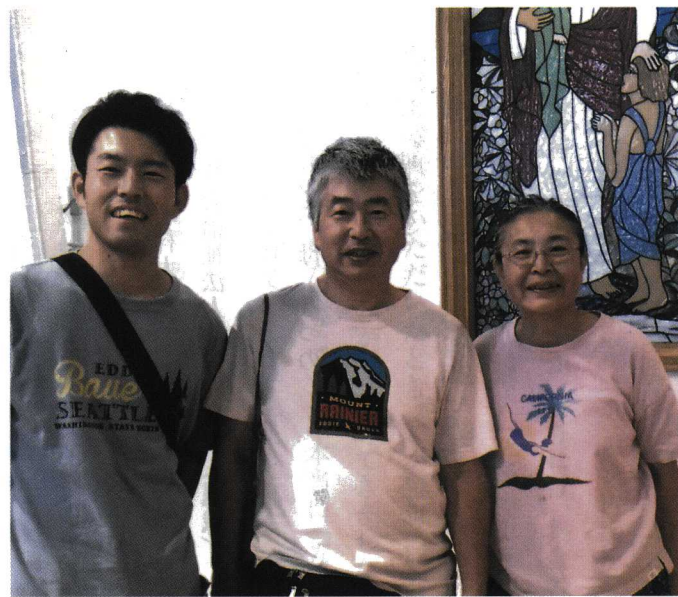
良い妻を見つける者はしあわせを見つけ、主からの恵みをいただく。
(箴言 18・22)

神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。
(詩篇 139・23~24)



主こそ私の受ける分です

海老根 純子



右端が純子さん、ご家族と

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。
(哀歌 3:22-24)

救いまで

私は一九五八年、茨城県北部の小さな田舎町に生まれ育ちました。父、母、一つ下の妹の四大家族でした。両親に愛され、特別な苦勞もなく、伸び伸び育ちました。家族は特に宗教や信仰を持っておらず、近くのお寺にある祖父母の墓参りに行くくらいでした。

高校まで親元で過ごし、大学の時上京しました。卒業後、自分の専門を生かし、聾学校(耳の不自由な子供たちの学校)に就職しました。そこは、ある宣教師夫妻が一九二〇年に教会の中で始められた学校で、信仰がベースにありました。毎朝、職員礼拝で一日が始まり、

讃美歌を歌って聖書朗読とお祈りを聞きました。この

時初めて自分の聖書を持ちました。職員のほとんどの方がクリスチャンで、未信者は私を含めほんの数人でした。信仰熱心な同僚は私を教会の日曜礼拝に連れて行ってくれました。帰り道、なぜイエス・キリストを信じたのか、なぜ礼拝に行くのかなどを話してくれましたが、私には理解できず、むしろ「どうしてこんなに熱くなれるのだろう」と不思議に思いました。私とは関係ない世界だとも思っていました。仕事のあとの同僚たちとおしゃべりでも、よく信仰の話が出ました。理解できない私はひたすら疑問をぶつけていました。それでも彼女たちは嫌な顔ひとつせず、静かに丁寧に答えてくれました。生意気盛りの私を学校全体が穏やかに、そして温かく包んでくれているように思いました。

やがて高校時代のクラスメートだった今の主人と結婚し、出産を機に退職しました。二人の男の子を授か

り、にぎやかな家庭生活が始まりました。

一九九六年三十八才の時、婦人科の病にかかり、入院し手術しました。その頃子供たちは小学生になっており、少しずつ自分の時間が持てるようになっていたので、再び自己実現の道を模索し、事を始めようとした矢先の入院でした。「人生思うようにはいかないな」と半分がっかりしながら、それでも退院して回復したらまた頑張ろうと思っていました。その時、隣のベッドにいらした方が集会の姉妹だったのです。入院中に、集会のみなさんがご自身の体験をつづった「光よあれ」や、他にもたくさん本をくださいました。様々な人生ドラマを一気に読みましたが、「私のわがまま」とか「罪」などのことばの示す意味がわかりませんでした。退院後しばらくしてその方から春日部家庭集会へのお誘いがあり、出かけて行きました。聖書の話が聞きたかったわけではなく、入院中に大変お世話になったのでお礼を言いたかったからです。ベックさんのメッ

7人の証し

Unser HERR lebt

セージを聞き、昼食を皆さんといただいて帰ってきました。帰宅後、妙に心が温かいことに気がつきました。あくる日は、無性に聖書が読みたくなり、主人と子供たちを送り出してすぐに聖書を読みふけり、いつの間にか涙を流して「そのとおりです、そのとおりです」と心の中で叫びながら読んでいました。素直にイエス様を信じることで、心にお迎えした時でした。

それから三か月後のこと。母方の祖父母の墓守が問題になり、実家近くのお寺にあった遺骨が東京の霊園墓地に移されました。これで私の実家はお寺となんの関わりもなくなりました。この出来事をきっかけに私はあることを思い出しました。

戦後間もなく日立に、地元の教会の方たちとアメリカ人宣教師たちによりシオン学園（現・茨城キリスト教学園）が設立されました。祖父は、シベリア抑留から奇跡的に生還した人でしたが、その学園に末娘（私の叔母）を入学させました。アメリカ人宣教師たちは田舎

の田舎だった祖父の家まで来てくれて伝道集会を開いてくださったそうです。その頃二十才前後だった私の母は、襖ふすまの陰から聖書の話を聞いていたとのこと。讃美歌を歌い、ともに祈り、自宅裏の川で受洗したと聞いています。その祖父母の近くに私は住んでいました。祖父は私が幼い頃に亡くなったので、直接イエス様の話を聞いた記憶がありません。祖父の救いから私の救いまでおよそ四十五年間、我が家には福音空白の時代がありました。主は私の家族一人一人をお忘れでなく、時いたってお約束を成就してください。主の御実を覚え、ひれ伏すばかりです。

主は遠くから、私に現われた。「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。それゆえ、わたしはあなたに、誠実を尽くし続けた。」（エレミヤ 31:3）

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒 16:31）

息子の死をとおして

二〇〇四年三月、次男が部活動の朝練習で走っていて急に倒れ、そのまま天国まで走り抜けて行ってしまいました。元気いっぱい十四才でした。

はじめは何が起こったのかと頭の中は真っ白でしたが、一方でとても冷静に我が子の死を受け止めていました。悲しみはあるけれど激しい慟哭どうきくはなく、ぼろぼろと涙がこぼれる程度でした。葬儀の後も掃除、洗濯、食事作りなど、それまで通りしていました。寝込むことは一度もありませんでした。この元気はいつたいたどこから来るのだろうかと思議でした。ただ、時々暗い陰が心にさしてきて胸のあたりが重苦しくなることがあります。新聞を読んでもテレビを見ても、心の重さはとれませんでした。気分を晴らすと散歩に出

てもだめでした。けれど集会に行くと、必ずその陰はすっかり消えてなくなっていました。また聖書を読むとその暗い陰が消えることもだんだんわかってきました。ある朝、聖句集「日々の光」に次のようなみことばがありました。

わたしはよみの力から、彼らを解放し、彼らを死から贖あがなおう。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。よみよ。おまえの針はどこにあるのか。（ホセア 13:14）

「本当ですか、イエス様。そんなことがあるのですか」と疑いながらもことばを読みましたが、その日之境に暗い陰は二度と襲って来ませんでした。それで私は、みことばこそいのちであり、死をも滅ぼしつくした主のよみがえりのいのち、永遠のいのちであると確信したのです。「みことば『イエス様』と体験的に知りました。その時からイエス様の復活を信じたただけでな

く、大いに喜ぶ者となりました。私は「死んでも主とともに生き、やがてよみがえりの体をいただくのだ」と確信し、天にも昇る喜びに満たされました。そして聖書の中に死からの解放のみことばを見つけ、また復活の希望を記したコリント人への手紙第一の15章を夢中で読みました。

私たちはみな眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならぬからです。しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた。」とされる、みことばが実現します。

(1コリント 15:51-54)

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」

(ヨハネ 11:25)

一方で「なぜ子どもをとられたのか」という思いがぬぐいきれず、悩みの中に沈むことが度々ありました。それは私には妊娠、出産についての罪があったからです。

若い頃、障害児教育を学び、障害のあるお子さんとその親御さんに関わってきました。共に子どもさんの成長を見つめ喜び合う中で、親御さんの悩みと苦労はいかばかりかと、独身の私には測り知れないものを感じていました。我が身に置き換えて考えた時、私はこのような重荷に耐えられるのだろうか…とも思っていました。結婚し、子どもを宿した時、何度もこの思いが頭をよぎり不安でいっぱいになりました。第一子は早期胎盤剥離のため帝王切開による出産。医師からは

骨盤が狭いので第二子以降も帝王切開と言われました。ますます妊娠・出産が怖くなりました。子どもはたくさん欲しいけれど、産むのが怖い。ついにこの重圧に耐えきれず、主人の了解を得、第二子出産時に卵管を結ぶ処置をしていただきました。我が家に遊びに来る子たちはみんな我が子と思えばいい、そんな乱暴な考え方でした。その後イエス様に出会い、聖書を知るにしたがって、自分の思いで勝手に胎を閉じるのは、神様の御意志に逆らう罪だと知りました。

見よ。子どもたちは主の賜物、胎の実は報酬である。

(詩篇 127:3)

果たしてこの罪のために子どもをとられたのでしょうか。それならば、絶望的です。しばらくの苦しみのあと、次のみことばが救い出してくれました。

主は、絶えず争ってはおられない。いつまでも、怒ってはおられない。私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いること

(詩篇 103:9-10)

また、亡くなった息子の写真の整理を始めた時のことです。「あの時この時、楽しかったねえ」と懐かしくも切ない思いになり、涙があふれました。何より恐れていたのは、親としての不甲斐なさ、感情的になつて叱りつけた日々が思い出されることでした。もう息子と話すことも謝ることもできないのですから。写真を見ながら、私の脳裏には犯したあやまちが次々と浮かんできました。けれどもそれらすべてが灰色なのです。まったく動きません。私を責め立ててくることはありませんでした。どういふことなのか。「私の罪は死んでいる、そういう意味ですか？ イエス様…」。そのとき次のみことばが頭の中を流れてゆきました。

いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされませんでした。

(コロサイ 2:14)

ハレルヤ！主をほめたたえます。私の罪は完全に赦されています。イエス様が私の身代わりとなって十字架にかかってくださったからです。これが私の確信となり、今も、そしてこの先もずっと主と共に歩むために、どうしても必要な事実であり根拠となったのです。主に感謝します。

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」

(イザヤ 1:18)

声でベックさんのあとについて祈りました。隣で聞いている私はただ驚くばかり。「お母さん、本気で祈っているの!? イエス様いいんですか!」と心騒がせていました。それから母は穏やかで元気になりました。数か月後、病に倒れ入院。日立の集会の皆さんがお見舞いに来てくださり、母も共に祈りました。眠れない夜、母の背中を黙ってさすっていると、「今日は歌わないの?」と賛美を催促しました。賛美すると落ち着くようでした。最期の日日は日曜日でした。三組の集会の方たちが母の所に寄ってください、それぞれ声をかけて賛美し、祈ってくださいました。夕方ごろ、呼吸が小さくなっていく母の顔に私の顔を付けて別れを言いました。そして「イエス様よろしく」と。本当に主に愛された人でした。

新しくされた結婚

二〇一七年四月、私が骨折入院中に主人は一人礼拝

7人の証し

Unser HERR lebt

私たちは、この御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。

(エペソ 1:7)

父、母のこと

父は私が救われて三年後に、二度ほど集会に集い、脳梗塞で倒れて召されていきました。倒れてから四日間、ただ天井を見つめたままで反応のない父に付き添いました。ベッドサイドで聖書を読み、賛美し、祈りました。心電図の波が小さくなっていく中「イエス様、お父さんのことよろしくお願いします」と祈りました。果たして父は天に昇ったのだろうかと思はらく悩みましたが、ただ主だけがすべてをご存知と私の思いは胸に納めました。

母は長いことイエス様も集会に集うことも拒んでいましたが、二〇〇九年、初めて大洗喜びの集いに参加しました。ベックさんとお話した最後に、大きな

に参加し、聖餐にあずかりました。八月、御代田にて夫婦で受洗しました。長い長い夫婦の不一致に終止符が打たれました。洗礼式に駆けつけてくれた長男の一言は「これで我が家の宗教戦争は終わったな」でした。彼もまた弟を亡くした悲しみに加えて、深い部分での私たちの不一致を感じ取り苦しんでいたのです。それですから、安堵の一言だったと思います。

主人が救われてからは、毎朝ともに聖書を読み、祈るようになりました。二人の間に横たわっていた深い溝も、徐々に埋められていきました。その年の暮れ、高齢になった主人の両親をサポートするために郷里の茨城に戻りました。次々と問題が起こり、その度ごとに二人で祈らざるを得ない日々となりました。そして祈ることにかつて味わったことのない満たしを覚ええました。主にある夫婦の一致と満たしとはこのようなものかと深く感動しました。それまで、喧嘩しながらも自分たちの努力によって築き上げてきた夫婦の関係とも、

子供たちがいたころのアットホームな生活ともまったく異なるものです。主がくださるものは、いつも私の想像をはるかに超えています。ただただ主の御名をほめたたえるばかりです。この新しくされた夫婦の歩みをいつまでも主が守り導いてくださいますように、そして親しい方々の救いのために心合わせて祈り続けていきますようにと願ひ祈っています。

私の心からの願ひは、近い将来イエス様と顔と顔をあわせてお会いすることです。それが唯一の励ましであり希望です。

今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔を合わせて見ることになります。今、私は部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。

(1コリント 13・12)

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。

(ピリピ 3・20)

自分の着物を洗って、いのちの木の実を食べる権利を与えられ、門を通って都にはいれるようになる者は、幸いである。

(黙示録 22・14)

海老根 純子(えびね じゅんこ)

一九五八年 茨城県高萩市生まれ、多賀郡(現・日立市)十王町育ち、櫛形小学校、十王中学校、日立第一高等学校、東京学芸大学特殊教育科卒業、日本聾話(ろうわ)学校(一九八五―八八年在職)

夫 敦(つとむ)

長男 豊(ゆたか)

すべてイエス様の御計画の中で

富田晃



一番左が富田さん、集会のみなさんと

私は一九五三年十二月二十一日に、農家の三人兄弟の長男として新潟県柏崎市で生まれ、三十一歳の時、イエス様の救いに与りました。現在は、新潟キリスト集會に集わせていただいております。今回、このような証しの機会をいただき、これまでの三十四年間のつたない信仰生活を証しできる恵みに心から感謝します。

イエス様との出会い

高校まで新潟県柏崎市で育ち、大学時代は関東に住み、二十四歳の時に現在勤務している会社に技術屋として入社しました。最初の二年間は研究所に勤務し、その後三年間は新潟県新井市にある工場に勤務しました。技術屋としてやっていけるという自信が持てた矢先の一九八三年四月に、東京本社の開発営業部に勤務となりました。その転勤は私にとって、「青天の霹靂」であり、技術屋失格と思い込み、非常に強い挫折感を覚えたものでした。自分の将来の事しか考えておらず、

精神的にパニック状態寸前でした。

話は前後しますが、家内とは、一九八〇年十月に結婚し、翌年十一月に息子が誕生し、転勤時は、娘が家内のおなかの中にいる状態でした。

東京本社の開発営業に配属後、周囲の人たちに支えられ、何とか仕事をこなすことができました。その年（一九八三年）は、娘の誕生、祖父の死、幼馴染の結婚式（おとこななじみ）という人生のいろいろな事を体験させていただいた年でもありましたが、いつの間にか挫折感はなくなっていました。

一九八四年十二月に社宅の人からクリスマス会のお誘いを受け、初めてこの集會に集まれる方々と話をすることになりました。その集まりの中で、私は自分の力で自分の人生を歩むべきであり、神様の力を借りることはおかしいと力説していました。そのような激しい口調でそこに集った皆さんと議論をしたにもかかわらず、皆さんが終始ニコニコされていたことが強く

印象に残りました。

一九八五年の二月十一日、武蔵野文化会館で開催された第一回喜びのコンサートに招待され、合唱や合奏と、ベックさんのメッセージや集會の方々の証しを聞きました。そこでは、終始穏やかな気持ちで聞くことができ、そこに集っておられる皆さんが持たれている何か得がたいものにひかれ、吉祥寺キリスト集會に集うことにしました。

同年三月三日に初めて吉祥寺キリスト集會に参加したところ、集會の皆さんが温かく迎え入れて下さり、今までに味わったことのない何か熱いものを感じたものでした。さらに三週間後には、軽井沢のバイブルキャンプに参加し、家内といっしょに、ベックさんと初めてお話しをさせていただきました。ベックさんに、私たち夫婦はよく言い争いをし、夫婦仲がうまく行っていないことをお話ししました。ベックさんは、「その原因はお互いがわがままだからだよ」とズバリ言われ

ましたが不思議と腹を立てることはありませんでした。そして、ベックさんが「祈りましょう」と言われ、祈ってくださいました。祈りの最後に、家内といっしょに「アーメン」と言ったのはつきり覚えています。

同年四月以降はほとんど毎週、日曜日には横浜から車で吉祥寺集會の礼拝に参加しました。そして、六月のある早朝、自宅で聖書を読んでいたら、それまでの自分の人生が自己中心的な歩みであったにもかかわらず、ここまですべて生きて来られ、家内と離婚もせずに夫婦関係を続けて来られたのはイエス様を守ってくださったおかげと思われ、熱い涙が止めどなく流れたのを覚えています。その時が、イエス様を信じ受け入れた時だと思っております。

一九八五年八月四日、吉祥寺キリスト集會にて、家内といっしょに洗礼を受けさせていただきました。その時に与えられた聖書のことばは以下のものでした。

あなたがたは自分の罪過と罪の中に死んでいた者であつて、そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている靈に従つて、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあつて、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。——

（エペソ 2:1-5）

一年後の一九八六年六月に、再度新井工場へ転勤となり、技術屋として再出発となりました。今思うと、東京での三年二か月は、イエス様と出会うための貴重な期間でした。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。しかし、人は、神が行われるみわざを、初めから終わりまで見きわめることができない
(伝道者 3・11)

人生最大のピンチ

イエス様の救いに与ってから、七年目の一九九三年四月、再び東京本社勤務となり、意気揚々として単身赴任で東京へ行きました。後で気がついたことですが、その時はまだ、信仰をもったとは言え、自己中心的で、イエス様から離れた状態でした。一九九五年十二月には、それまで順風満帆であった仕事が突然うまく行かなくなり、一人悩んでしまいました。その原因は、当時、お客様に事実とは異なる説明をして営業活動をしてしまっていたことでした。

その時は、当然、自己中心的な信仰であったため、イエス様にゆだねることもせず、会社の人にも相談でき

ず、自分の力で何とかしようとあせっていました。この先、自分はどうなってしまうのだろうかと自分のことばかりしか考えることができず、いわゆる、ノイローゼになってしまい、眠れない日々が一月ほど続きました。自殺も頭をよぎりました。人生最大のピンチでした。

こうした時に、一九九六年四月に、再度、新井工場へ転勤となりました。この時は、一九八六年の転勤の時とは全く異なり、自信喪失状態でした。今では、この当時の大きな試練は、自分の高ぶりや傲慢さを砕き、信仰を成長させるためにいただいた、主なる神様からの恵みであったと確信しています。

主を恐れることは悪を憎むことである。わたしは高ぶりと、おごりと、悪の道と、ねじれたことばを憎む。

(箴言 8・13)

欺きのはかりは主に忌みきらわれる。正しいおもりは主に喜ばれる。高ぶりが来れば、恥もまた来る。知恵はへりくだる者とともにある。
(箴言 11・1〜2)

新井工場へ戻ってから、自信喪失と劣等感の感情を抱いて、毎日を送っていました。このような時、主なる神様は、私に富山にある集会にて日曜日の礼拝の後で行なわれる福音集会にて聖書のみことばを取りついで語る機会を与えてくださいました。

しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。これは、神の御前でだれも誇らせないためです。しかしあなたがたは、神によってキ

リスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとつて、神の知恵となり、また義と聖めと、贖いとなられました。
(1コリント 1・27〜30)

新井工場へ戻ってから三年目の一九九九年五月二十五日、新井工場でモノクロ酢酸による薬傷トラブルが発生し、自分の部下がモノクロ酢酸に触れ、六時間半後に死亡するという痛ましい事故が起きしました。

この事故の一月前に、一九八五年当時に横浜社宅で親しくさせていただいた集会の方が新井工場へ転勤して来られていました。その方は、会社の仲間としてではなく、同じ信仰を持つ者として励ましてくれました。その事故を通して、自分自身を見ようとする信仰から、ただイエス様だけを仰ぎ見る信仰に変えられました。

ふたりはひとりよりもまさっている。ふたりが労苦すれば、良い報いがあるからだ。

どちらかが倒れるとき、ひとりがその仲間を起こす。倒れても起こす者のいないひとりぼっちの人はかわいそうだ。

(伝道者の書 4:9-10)

翌年の二〇〇〇年三月に、新潟にも集会が起こされ、集うようになったことは、この上もない恵みでした。このような人生最大のピンチと思った出来事を通して、心からイエス様を仰ぎ見ざるを得ないという恵みに変えられました。

事故でお亡くなりになった従業員の方とは、天国で必ず再会させていただけると思っています。

何事でも神のみごころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いて

くださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るので。

(1ヨハネ 5:14-15)

各地の集会に集って

一九八五年三月から、吉祥寺キリスト集会に一年三か月ほど集わせていただきました。その後は、富山集会へ二年ほど、単身赴任時は吉祥寺集会と富山集会に、ノイローゼとなった後は富山集会と御代田集会へ、そして二〇〇〇年から五年間、新潟集会に集わせていただきました。そして、二〇〇五年四月より四年間は西神集会へ集わせていただき、二〇〇九年以降は再び新潟集会に集っています。

三十四年間の信仰生活において、転勤を通して、いろいろな集会で神様からの恵みに与ったことは感謝でした。自分がイエス様によって救われる前に、漠然とではありますが、会社人間にはなりたくないという願いがありましたので、それがかなえられ、いろいろな

人生を経験されている集会の皆さんとお会いできたことは主なる神様からの大きな恵みでした。イエス様を中心とした集会の皆さんとの親しいふれ合いは、何の

しがらみもなく、ただイエス様に喜んでいただくために何をしたら良いかだけを求めて行けばよかったからです。しかし、その一方で敬愛していた方々が集会を

離れて行かれるというつらい出来事もありました。ある時、このことを、ベックさんに相談させていただきました

ところ、「離れて行ったことは寂しいが、イエス様から離れて行かない限り、天国での再会が約束されているよ。だから、イエス様から離れないように切に祈っていいかい」と言われました。このことで、人を気にすることではなく、いつも目にこそ見えませんがイエス様が共にされると信じることで平安な思いが与えられることを気づかせていただきました。

今、いろいろな事がこの地上で起きており、再臨が近いと言われている時代に入っていますが、イエス様

から離れないよう、自分の立ち位置を切に祈り求めながら歩んでいきたいと思っています。

神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。

(詩篇 139:23-24)

以上、つたない三十四年間の信仰生活を述べさせていただきましたが、ある病者の姉妹の詩をご紹介します。終わりにさせていただきます。

『悔い改めとゆるい坂道』

今、ゆるい坂道を下っています。

「低くなりなさい」と言われる声を聞いた時、

自分の今いる場所がやっと分かりました。

高ぶる心と自己中心と人への無理解を持ち、私はな

んと主から遠く離れて来てしまっていたのでしょうか。
主が「わたしに帰りなさい」と呼びかけてくだ
さったから私はやっと方向を変えることができま
した。

今、ゆるい坂道を下っています。

下り始めたばかりなのに、気がつくとも後戻りした
りしています。

それでも坂道の一番下に主は待っていてくださ
います。

両手を広げてすべての人よりも低くなられて、
「わたしのようになくなりなさい」と教えてくださ
います。

低くそして大空高く主はいつもいてくださいま
す。悔い改めの景色と平安の中、私はゆっくり坂道
を下っています。

よろこびと感謝に溢^{あふ}れています。

富田 晃（とみた あきら）

一九五三年十二月 新潟県柏崎市生まれ、県立柏崎高
校、埼玉大学理工学部、東京工業大学化学工学科修士
卒、株式会社ダイセル 新井工場勤務

妻 幸子（さちこ）

長男 堯（たかし）、長男の嫁、弥生（やよい）、

孫 百華（ももか）

長女 羽深理恵（はぶかりえ）、

長女の夫 羽深将人（まさと）、

孫 紗羅（さら）、颯真（そうま）



キリスト集会へのご案内

吉祥寺キリスト集会

東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11

【電話】0422-21-8450 (集会所)

日曜礼拝・福音集会

10:30 / 18:30

火曜学び会 11:00

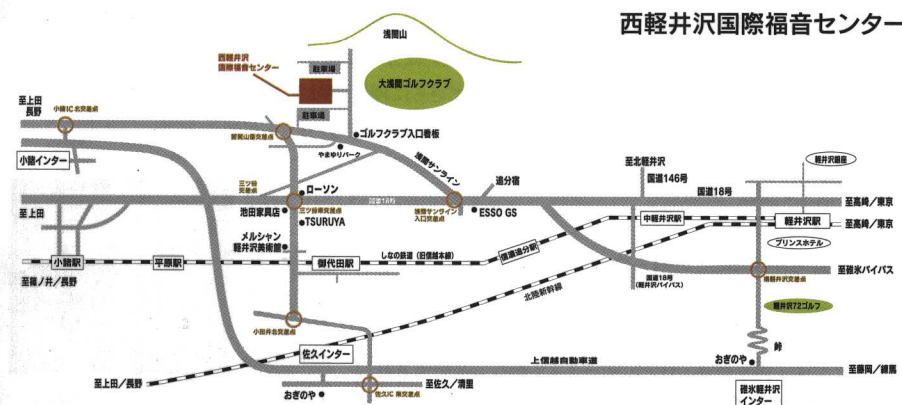
木曜祈り会 19:00

子供日曜学校 9:30

中高生日曜クラス 9:30



西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター

【電話】0267-32-6400

長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 ☎389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス

【電話】0267-32-6444

長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 ☎389-0201

■ しのの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分(1000円程度)徒歩45分=3km

御代田へは東京駅より北陸新幹線にて軽井沢駅下車。しのの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。

■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。

いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。

みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によりこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。

出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、パンとぶどう液にあずかります。

あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。

礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。

快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

モーセの十戒 神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを感じ知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと—ヨハネの黙示録 (第1～4巻)

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。

しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ—私たちは主のもの

証しシリーズ (第1～9集)

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。



実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにものも私たちが神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

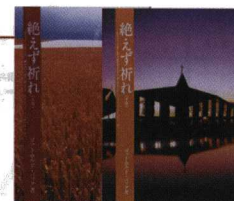
吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。



■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先 〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町 4-9-11 吉祥寺キリスト集会

集会の出版物

主は生きておられる 第49号
定価100円（税込み）2018年11月15日初版

編集スタッフ 岩本秀造 石塚稔成 石塚優子 黒澤錬二
鈴木力 芳我幸雄 福留伸子 牧野正士
印刷・制作 新生宣教団
題字デザイン 飯守恪太郎
発行所 キリスト集会
サイトマップ(キリスト集会のご案内) <http://christ-shukai.net/>

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせていただきます。
ご協力ありがとうございました。